都市古謡「お茶場唄（節）」について

筆者は『市史通信』第二三号（二〇一五年七月刊）に「横浜の古民謡」を掲載した。「横浜の古民謡」は、現在の横浜市域で、庶民によって歌われた、儀式唄・祝い唄、仕事唄、娯楽唄・酒宴唄、わらべ唄などを、戦前から戦後にかけて、幾度か取り組まれた古民謡調査や公演活動の記録から紹介したものである。

古民謡とは、基本的につくり人・うたい人知らずで、いつから歌われ始めたかもわからぬものである。しかしながら「横浜の古民謡」のうち、横浜が開港場となって都市化して以降に誕生したことが明白なものがある。幕末～明治初期の英仏駐屯軍を歌詞に織り込んだ「野毛山節」や、輸出茶の再製場で歌われた「お茶場唄（お茶場節）」。横浜船渠が歌詞にある「波止場船頭歌」、西洋洗濯屋の労働歌「ポンコツ節」「ザラ板節」である。また歌われた場こそ厳密には都市とはいえないものの、輸出生糸の生産現場で歌われた「糸とり唄」、器械製糸場で歌われた「製糸場唄」なども含めておこう。ここではそれらを便宜的に「都市古謡」と呼ぶこととする。

古民謡は、同じタイトルであっても、伝承する者によって、うた（歌詞）やふし（メロディー）が異なることが一般的である。さきに挙げた都市古謡のうち例外的なのは、明治初期の娯楽唄「野毛山節」である。「野毛の山」ないしは「野毛の山から」のタイトルで、一九世紀中には手風琴や三味線の独習譜として普及したことが理由である（三田村楓陰著『手風琴速成独習自在』明治二六年刊、など）。また「野毛山節」が酒席などで披露される開放的なはやり歌、すなわち「ハレ」の唄であるのに比して、その他の都市古謡が労作唄などの日常的・閉鎖的な「ケ」の唄であって、多くの人の口哦にのぼるものでないという性質のちがいがあった。

文献資料上からみた「お茶場唄」

戦前から戦後にかけて、都市古謡を伝えた者たちの数は多いとはいえず、古民謡の公演記録をみても代表的な演者は一人か二人であった。しかし「お茶場唄」に関しては、うた・ふし、ともにいくつかのバリエーションが確認でき、文献資料も残っている。

「お茶場唄」あるいは「お茶場節」と呼ばれる古謡は、横浜から盛んに日本茶が輸出されていた一九世紀後半に誕生し、明治三二（一八九九）年に全国最大の茶の産地静岡県の清水港が開港して、横浜の製茶貿易が衰微したのちも長く歌い継がれた。

「お茶場」とは、全国の産地から集まった茶が、海上輸送で変質しないよう、横浜で今一度、鍋ないしは焙じ籠で加熱して乾燥させる施設で、茶を輸出する外国商館が山下居留地内に設置した。茶焙じは、国内のお茶が出回る初夏から九月いっぱいにかけて、主として女性が担った季節労働であり、夏季に加熱する焙じ場の過酷さは明治期の文献や新聞などでもしばしば紹介され、近年歴史研究もすすんでいる（粟倉大輔『日本茶の近代史』二〇一七年刊、水田丞「外国人居留地における茶再製場の建築と再製装置」『日本建築学会計画系論文集』第六三九号、二〇〇九年五月刊）。

新聞記事などを除けば、横浜新報社編『横浜繁昌記』（一九〇三年刊）が「お茶場」について論じた最も旧い文献の一つである。その「茶焙じ」の冒頭には「毎年初夏の候から真夏へかけて横浜へ出懸けた人は必ず元居留地内の所々でガタリガタリと機械の音がして而かも余り奇麗でない庫の、金網張つた薄暗い窓の中から『お茶場ヤッコラサ』で溜めたる金を、皆んなお前にいりあげた……』と云ふ様な変つた節の唄の洩れて来るのを聞くであらう、俗にお茶場稼ぎと云ふのは即ち是れなのである」とあり、「お茶場唄」と不即不離で紹介されている。さらに「唄としては都々一か端唄、それも頗ぶる人口に膾炙した有り触れた唄ばかりであるが、種の節即ち調があつて他の種類の者は謳へぬ此の節は元と本牧辺の流行唄から来たもので大に緩やかな処が拍子に合ふので茶焙じしながら謳ふには持つて来いの節とも云ふべく、旁々聞いてはさまで面白い事はないが以来数十年今に尚ほ廃らず、金網の隙から洩れてお茶場唄の名を成して居るのである」とあり、本牧あたりのはやり唄が元、とある。しかしながら『横浜繁昌記』では「お茶場唄」の歌詞は、先に記した『お茶場ヤッコラサ』で溜めたる金を、皆んなお前にいりあげた……』のくだりだけであった。

短いながらもこのうたの部分を「お茶場唄」の元歌とする見解がある。椎橋善男「横浜お茶場の唄」（茶業協会『茶』第二巻四号、一九四一年七月号）がそれで「『お茶場、やつこらせで、ためた金、みんなお前さんでちゃ〳〵

お茶場の光景　明治中期　横浜開港資料館所蔵
石造り・煉瓦造りの建物、夏場に火力を用いるお茶場の環境は劣悪・過酷であった。この作業によって茶の目方は約4分の3となった。「鍋焙」された輸出茶は「Pan Fired」と記された。

むちゃくドッコイ、ヤレヤレ』これがお茶場唄の元唄のかたちとなつてゐる。この文句の通り若い娘さんよりお女房さん連中が多かったのである」とあり、「ドッコイヤレヤレ」の囃子ことばをつけて紹介している。

椎橋の「横浜お茶場の唄」には、その他の歌詞も掲載されているので以下に記してみよう。

①朝の三時から、弁当箱下げて、お茶場通いも意気なもの

②鳴くな吠へるな泥棒ぢゃないよ、亜米三通ひの、お茶焙じ

③野毛山の鐘がゴウンとなりや、瓦斯燈が消えて、早く行かなきゃ、釜がない

④開けておくれよ門番さん、けふの天保を貰はなきゃうちの鍋釜総休み、箸と茶碗が隠れんぼ、飯盛杓子が隠居して、お玉杓子も身を投げた

⑤鬼の百一、情けの五番、情け知らずの十九番

元唄に加えて、①～⑤の歌詞は、広く文献等でも紹介される歌詞となる。横浜第一の茶商大谷嘉兵衛商店に勤め、長年お茶場での仕事に従事した西村英之助（一八七四～一九五六年）の「女工の哀歌に明けくれた―お茶場―」（毎日新聞横浜支局編『横浜今昔』一九五七年刊、所収）においても、ほぼ同じうたが紹介された。また福島雄次郎氏らが昭和四四（一九六九）年ころ、池田チヨ（八四歳）から採集した「お茶場節」は、以下のとおりである（神奈川県郷土民謡研究会編『神奈川ふるさとの民謡』一九九〇年刊、六九頁）。

鬼のミミ　仏のアミ
情け知らずのすり（ママ）針屋敷
　あけておくれよ門番さん
　今日の日当もらわなきゃ
　箸と茶碗がかくれんぼ
　お玉杓子が身をなげる
お茶をもんでるのに
やれもめやれもめと
　アラヨットトーエ
わたしゃあんまさんの弟子じゃない
　アーヤレチョイトチョイト
朝の三時から弁当箱さげて
　天保二、三枚じゃ情けない
お茶場やっこらせでためたる金は
みんなあの人で茶々無茶苦

竹籠による茶焙じ　明治中期　横浜開港資料館所蔵
「籃焙」と称された。焙じられた茶は「Basket Fired」の名で輸出された。

横浜古民謡保存協会

昭和三三（一九五八）年の横浜開港百年祭をはさんだ前後の時期は、横浜の古民謡の公開・保存についてもっとも精力的に力が注がれた時期であるといえる。その主体となったものは、三二年八月に設立された横浜古民謡保存協会（会長半井清、副会長新堀源兵衛・堀内萬吉）の活動であり、横浜市教育委員会の支援のもと、三五年ころにかけて市内外のいくつかの公会施設で公演がもたれた。

この横浜古民謡保存協会の編集になる『横浜古民謡集・上』は、昭和三三年六月一五日の東京六本木の国際文化会館での、同じく『横浜古民謡集・下』は昭和三四年三月二四日に県立音楽堂での公演記録であり、上・下いずれにも「お茶場唄」が掲載されている。以下、唄い手が判明する『下』に掲載された「お茶場唄」について紹介しよう。

〔合唱〕アイヨットトーエー
お茶場やつこらせと蓄たる金は
皆んなお前さんで茶々む茶く
　ドッコイヤレヤレ
〔山口元重・六五才〕
朝の早うから弁当箱下げて
お茶場通いも楽じゃない
開けてお呉よ門番さん
入れてお呉よ火番さん
今日の天保貰はなきゃ
鍋釜へつつい総休み
箸と茶碗がかくれんぼ
おまゝ杓子が隠去（ママ）して
お玉杓子が身を投げる
　ドッコイヤレヤレ
〔松野ツマ・七八才〕
私しゃ磯子の貝殻育ち
貝の柱に牡蠣の屋根
浅草海苔んを一寸かけて
粋な浅利と添うよりも
矢つ張りお前のバカがよい
　ドッコイヤレヤレ
〔池田ヨシ・七九才〕
野毛山の鐘がゴーンとなりゃ
港が白む
早く行かなきゃ釜がない
　ドッコイヤレヤレ
〔鈴木良助・七五才〕
暗い夜道に犬奴が吠える
行うか戻ろうか思案すりゃ
お米ないのを思い出す
港でお船がボーとなる
　ドッコイヤレヤレ

四人の唄い手の年齢は、公演当時のものであり、逆算すると一八八〇～九〇年代の生まれである。これらはお茶場で働いた経験はないものの、山下町のお茶場を直接見て、「お茶場唄」を直接聴いた世代であるといえよう。このうち、山口元重単独の「お茶場唄」については、昭和三五（一九六〇）年五月一二日の南区公会堂での公演音源があり、CD「横浜うた物語」（二〇〇九年・キングレコード、品切）に収

録されている。

アイヨットイエ
流れ流れて　着いたる土地は
アイヨットイエ
ここは横浜開港地
　アドッコイヤレヤレ
港を見れば百船（ももふね）で
煙は空を焦がすなり
出船入り船で賑やかさ
　アドッコイヤレヤレ
アイヨットイエ
野毛山の　野毛山の
　アナンダナシダイ
鐘がゴンと鳴りゃ　ガス灯が消える
　アイヨットイエ
早く行かないと釜がない
　アドブコイヤレヤレ
朝の三時から弁当箱さげて
　アイヨットイエ
開けておくれよ門番さん
かけておくれよ火番さん
今日の天保貫わなきゃ
鍋釜へつっい総休み
箸と茶碗がかくれんぼ
飯盛杓子が隠居して
お玉杓子が身を投げる
　アドッコイヤレヤレ
アイヨットイエ
お茶場ヤッコラセと貯めたる金は
アイヨットイエ
　みんなお前さんで　茶々無茶く

古謡の継承―お茶場から繭屋敷へ

椎橋善男が「横浜お茶場の唄」を残したのは、横浜での茶再製の最盛期から四〇年以上が経過し、「お茶場」が失われて久しい時代であった。そしてその末尾には「再製工場は静岡市に新工場作られ遂にその姿を消してしまった。然しお茶場の唄だけは屑糸とりに転業した女工がそのまゝ作業に歌つて伝承してゐる」と記している。

「屑糸とり」の屑糸とは、生糸を生産する過程で生ずるキビソ・ビスなどと呼ばれる副蚕糸のことである。生糸の原料となるのは、蚕繭の本糸部分であって、蚕が繭を結ぶときに、自らを固定するために最初に吐き出す糸や、繭を結び終わるときに吐く糸は、細く生糸に挽くことはできない。この部分が屑糸となる。屑糸は漂白して短繊維として展開し、紡績工程をへて、絹紡糸となる。いまだ国内での絹糸紡績業が充分に発達していない一九世紀の段階では、屑糸のほとんどはヨーロッパにむけて輸出された。絹糸紡績の原料となるものは、蚕が成虫となって繭層を喰いやぶった「出殻繭」などの屑繭も含まれる。屑糸・屑繭は副蚕糸と称され、副蚕糸を扱う外国商館は「繭屋敷」といわれた。前田橋近くのフランス系「繭屋敷」に一八才から六、七年勤務して、「お茶場唄」を覚えた女性の唄が昭和五四・五五年にかけて実施された民謡緊急調査の成果として残されている（永田衡吉著『神奈川県民俗芸能誌　民謡編』一九八二年刊三〇八～三一二頁。神奈川県教育委員会編『神奈川県民謡緊急調査報告書』一九八一年刊九六頁、また音源は神奈川県立図書館に架蔵されている）。

唄い手は、長谷川やま（一九〇九年生）と長谷川きよ（一九一四年生）であり、昭和初期に「繭屋敷」で覚えた勘定となる。二人は「お茶場節」の名称で記憶していた。また、唄い手と囃し手の相互の掛け合いが見事なもので、大勢が集まるお茶場での唄もこのようであったのではないかと想像することができる録音である。

エー皆さまヨー今日もうれしやナー
　ヨ　※ハ、ナンダコリェ
皆さまと一座　※アラヨットウェー
明日はどなたとエー　一座やら
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
昔なじみとなーヨ
　※ハ、ナンダコリェ
紅がら染めは　※アラヨットウェー
色はさめてもエーきは残る
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
エー声は枯れてもナーヨ
　※ハ、ナンダナンダイ
朝ではなーいヨー
　※アラヨットウェー
みんなお前さんにエー吸い取られェ
　ー　※ハ、ドッコイヤレヤレ
エー　私しゃ本牧のナーヨ
　※ハ、ナンダコリェ
貝殻そだち　※アラヨットウェー
貝の柱に　牡蠣の屋根
　※ア、ドシタイ
粋な浅蜊と添うよりも
　※ア、ドシタイ
やっぱりお前さんのエー馬鹿がよい
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
エー　朝の六時からナーヨ
　※ハ、ナンダコリャ
弁当箱さーげーて
　※アラヨットウェー
前のおばさん行こうじゃないか
　※ア、ドシタイ
隣のおばさん行こうじゃないか
　※ア、ソリェ
今日の天保　もらわなきゃ
　※ア、ドシタイ
鍋釜へつっい　総休み
　※ア、ソレェ
箸と茶碗が　かくれん坊
　※ア、ソレェ
飯盛り杓子がエー　隠居する
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
エーひとつあげますナーヨ
　※ハ、ナンダコリェ
おきよちゃんとやらーに
　※アラヨットウェー
なにはともあれェお杯
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
エーお杯ならヨー
　※ハ、ナンダコリェ
いただきまーすーよ
　※アラヨットウェー
すぐにこの手でご返杯
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
おきよちゃんヨー唄もうたわずナー

ヨ　　※ハ、ナンダコリャ
囃しもせずーに
　※アラヨットウェー
なにかご辛苦がエーもめるのぉかー
　※ハ、ドッコイヤレヤレ
エー何もご辛苦はナーヨ
　※ハ、ナンダコリェ
もめるのじゃなーいーが
　※アラヨットウェー
この頃お前さんのエー　痩せたこーと
　※ハ、ドッコイヤレヤレ

前掲『横浜古民謡集・下』の「お茶場唄」で、松野ツマは「私しゃ磯子の貝殻育ち」と唄い、この「お茶場節」では「私しゃ本牧の貝殻そだち」と唄う。どちらが元歌に近いかといえば、本牧であろう。「粋な浅利と添うよりも、やっぱりお前さんの馬鹿がいい」の歌詞が決め手である。本牧鼻の北側に広がる浅瀬の海は、東京湾でも有数のアサリとバカ貝の漁場であった。アサリのような磯砂の浅場でふれあう関係よりもバカ貝が棲息する深いところでつながっている「お前さん」との仲かよい。いくら私がお茶場で稼いでも無駄遣いしてしまう「お前さん」だけれども……、ドッコイヤレヤレ……、という、あきらめにも似た身の上をつつみ呑み込んだような歌詞が、お茶場唄の最大の魅力である。また冒頭に紹介した『横浜繁昌記』の「此の節は元と本牧辺の流行唄から来たもので大に緩やかな処が拍子に合ふ」との文章にも一致するのである。

また、「お茶場唄」の音源としては、さらに一つ、前出CD「横浜うた物語」に鶴見の山崎忠三郎氏によるもの（昭和五八年一月五日録音）が収録されている。その歌詞は以下のとおりである。

朝の三時から弁当箱さげて
　お茶場通いも粋なもの
　ヤットー　嘘じゃないよ
お茶場ヤッコラセと貯めたる金は
みんなあなたで　ちゃちゃむちゃく
　ヤットー　嘘じゃないよ

全体的にうたの展開が乏しく、囃子ことばが「ドッコイヤレヤレ」と異なり独特であるが、横浜中心部から離れた鶴見での継承として、貴重な資料となっている。

「お茶場唄」の異唄について

前掲『横浜古民謡集・下』には、これまで紹介してきた「お茶場唄（節）」とは別の趣の「お茶場唄」も掲載されている。確認することができた三つの音源と歌詞のうえでのリンクが確認できない。

お茶はよいけどよい茶の出どこよ
　私しも行きたやお茶煎りに
　犬や吠えるな泥棒ぢゃないよ
　私やお茶場のお茶ホージ
　鬼のミーミー仏のアミー
　情け知らずの摺鉢屋敷

実があったら生茶もんでおくれ
　帰りにゃ音に名高き公園地
　花園橋を横に見て
　柳の下の芝の上
　夫婦約束しておいで
家の隣を申し上ましょう
　忠臣蔵ではないけれど
　元禄格子としゃれてはいるが
　竹の柱に笹の屋根
　寝てて大星おがむとも
　仕事は千崎弥五郎で
　飯は朝喰って伴内でも
　他所へ行っては定九郎
　娘は浮気でお軽でも
　槍が降ろうが鉄砲玉しようが
　それでも主は与市兵衛
私の近所に芋やさんが出来た
　表のかんばん十三里
　私の買ったは十里だよ
　蒸しがあまいか知らないが
　噛んで見たらば五里五里だ
　常雇火番さんがいくら威張っても
　お茶は生茶じゃあがらない〔下略〕

「犬や吠えるな泥棒ぢゃないよ」「鬼のミーミー仏のアミー情け知らずの摺鉢屋敷」のうたは、これまで紹介した歌詞と触れあう部分があるものの、忠臣蔵を題材としたうたはまったくみあたらない。これもお茶場で歌われたものなのである。

現代の「お茶場唄」

現代でも、横浜の民謡としてお茶場唄を吹き込む歌手がいる。藤沢出身の民謡歌手富田房枝が唄う「神奈川県民謡　お茶場唄」である（CD「民謡ふるさと紀行」二〇〇六年、ビクターエンタテインメント）。その歌詞に創作者は記されてないが、著作権が不明なので歌詞の全文紹介は控える。富田の「お茶場唄」は「開けておくれよ門番さん」「飯盛り杓子が身を投げる」「お茶場やっこらせとためたる金はみんなお前さんの茶々目茶無」などのこれまで紹介した歌詞に加えて、「もめやもめもめ、もまなきゃよれぬ　もめば古葉も粉茶となる」「茶師は茶部屋で茶摘は原へ　茶師と茶摘の根競べ」などの歌詞が織り込まれている。

ポップス界の夫婦デュオ、ダ・カーボも「お茶場節」を吹き込んでいる。CD集「オリジナル大全集122」（二〇一三年、日本コロンビア）に収録されている。その歌詞は「オリジナルを尊重し、そのまま収録・掲載しております」と断りがあるが、オリジナルが那辺にあるのかは、古民謡の場合確定することはできない。灼熱の夏場、働かなくては日々の食事にも事欠く境遇、苦労して貯めたお金を使ってしまう「お前さん」の存在、それでも切れぬ仲…。煉瓦造・石造の「惨苦の茅屋」であった「お茶場」のイメージは、二人の澄みきった歌声からは伝わってこない。そこには軽快でリズミカルな茶焙じの世界があるだけである。

（平野正裕）